

## 研修会報告

### 第64回全日本教職員バドミントン選手権大会 研修会

講師：BWF（世界バドミントン連盟）国際審判員

坂本 恵美

#### ☆スライド1（タイトル）



本日は岡山県で同じ国際審判員として活躍されている市川佑さんのお誘いで、このような講演の機会をいただき、感謝しております。ただ、歴代の講演者の方々に比べると、私は人前で話をするのも本当に苦手でして、引き受けてから後悔し今日までとても落ち着かない毎日でしたが、なんとか頑張りますのでよろしくをお願いします。

ところで、私のことを見たことあ

るとか聞いたことがあるという人はいらっしゃいますか？

オリンピックに選ばれたと言っても選手ではないので、あまり知られていないかと思います。審判員というのは競技大会においてなくてはならない存在でありながら、あまり注目されず、陰で支える存在のような気がしています。しかし、その役割にもプロフェッショナルな資格があり、誇りを持つ魅力的な部分が大いにあることを多くの人に知ってもらいたいと思っています。

では、はじめに自己紹介と少し国際審判の基礎知識についてお話させていただきたいと思います。

#### ☆スライド2（経歴）

#### ☆スライド3（ピラミッド）

日本には現在何人の国際審判員がいるかご存じですか？ 実は今9人しかいないんです。本日よりしている高橋さんや谷上さんが現役でいらした時はもっとたくさんいたと聞いておりますが、それに比べると少し寂しい感じがしております。各国もそこまで多くはないのですが、日本においては若手の国際審判員が少ない状況で、今いろいろな形で魅力を伝え、育成を進めようとしています。

では、どのようにしたら国際審判員になれるのか、これもご存じない方が多いと思います。みなさんは国内の3級から審判員資格を取ることになりますが、国際審判になるには十分な知識と経験が基礎となりますので、1級審判員の資格を取得したものが望ましいとされています。まず、都道府県からの推薦を受け、国内での「国際審判員養成セミナー」というものを受けるところから始まります。

.....

## ☆スライド 6（今日のお話）

## ☆スライド 7（タイトル）

### 1. パリオリンピックへの道のり ①国際審判員との出会い

私が国際審判員という仕事を知ったのは、2011年の地元の高体連の大会の時でした。バドミントン部の顧問となり、審判資格を取りましたが、まだそれほど経験もなかったころでした。たまたま当時の高体連の委員長と話をする中で、英語の教員だし、国際審判目指してみたら、と言っただき、急きょ、ジャパンオープンで開催される国際審判養成セミナーに参加することになりました。

## ☆スライド 8（国際審判養成セミナー）

## ☆スライド 8（国際審判養成セミナー）

当時は国際大会も見たことがなく、国際審判がどんなものなのかまったく分からないまま参加したセミナーでした。私の講義をしてくださったのは、山田順一郎先生と三王知治先生で、国際審判員としての偉大な方々でしたが、お二人に呆れられてしまうほど、国際大会については何も知らずに行っていました。もちろん初の国際大会での審判でしたので、実技ではいろいろとやらかしてしまいました。中でも、初めてサービスジャッジに入り、試合後に座ったまま選手と握手してしまったこと、試合前にネットの高さを計るのですが、素早くしっかり図ることができず、選手に低いんじゃないか、とあとから言われてしまったりとだめだめでした。しかし、たった3日間の講義と実技のセミナーでしたが、私にはとても収穫の多い充実した3日間でした。その時から、私は国際審判員の魅力と奥深さにのめりこんでしまいました。

## ☆スライド 9（BA-A の試験）

## ☆スライド 9（受験者集合写真）

翌年、韓国で行われるアジア連盟の国際審判員試験に日本協会から推薦していただき、参加しました。写真はその時のアセッサ（試験官）と受験生です。講義と筆記試験、アジアジュニア選手権での実技試験が1週間ほどありました。マレーシア、インドネシア、中国、タイ、韓国など各国から受験者が集まりましたが、1週間以上ともに勉強・実技を通して協力し合い、仲間としての絆が生まれました。

## ☆スライド 10（部屋で勉強）

毎晩部屋に集まり、試験勉強をしたり、実技での経験を共有していました。

## ☆スライド 11（食事）

地元の受験生が案内してくれて、本場の韓国料理の食べたりして、文化交流の機会にもなりました。たくさんの小皿料理がいつも提供され、キムチはもちろん定番でした。試験の緊張感はありましたが、常に笑いが絶えない仲間との時間がとても楽しかったです。

## ☆スライド 12（日本選手たち）

写真は当時、アジアジュニア選手権に参加していた日本代表の選手たちです。見覚えのある選手がたくさんいるとおもいます。だれだかわかりますか？ 古賀輝選手が最年長で、桃田選手、西本選手がいました。

### ☆スライド 13（日本選手と審判団）

女子は奥原選手、大堀選手、山口選手はまだ中学生で参加していました。この時のU19は選手がそろっていて、団体戦では予選リーグで負けた中国に決勝では3－0で勝利し、優勝しました。海外選手も中国の男子シングルス、シー・ユーチー選手、女子はインドのプサルラ・V・シンデュー選手、東京、パリと男子ダブルスで金メダルの台湾のワン・チーリン選手はシングルスで出場していました。東京オリンピックで金メダルのミックスの中国選手、ワン・イルユーとファン・ドンピンはこの時からペアを組んでいました。その時は自分のことで精一杯でしたが、すごい選手たちの審判をしていたのだと振り返ってみて思います……

### ☆スライド 14（大会終わりの集合写真）

受験生は国、年齢、性別、ばらばらでしたが、みんな明るく個性豊かで、英会話力もそこまでない私をいつも助けてくれて、彼らのおかげで初めての試験を乗り切れたのだと今でも感謝しています。そしてその時の受験者は全員合格し、はれて国際審判員としてのスタートを切ったのです。

「国際審判員」という新たな自分が誕生したこの瞬間が、私の人生の大きな転機となりました。

### ☆スライド 15（ジャパンオープンの集合写真）

その後、年に1・2回ずつ、国際大会に参加させていただき、先輩方や海外の審判員の方々にご指導いただき、2016年に中国で開催されたアジア選手権で、BA-Cの試験を受けました。

### ☆スライド 16（BA-C の試験 アジア選手権 2016）

この年はオリンピックイヤーで、競った試合が多かったのを覚えています。高橋先生もプレゼンターでいらっしゃっていました。

### ☆スライド 17（タイトル）

#### 2018 BWF アプレイザル アジア団体選手権

2017年12月、韓国マスターズでアプレイザルという予備試験、そこから選ばれたメンバーが2018年2月にマレーシアで行われたアジア団体選手権でのメントリーコースに進みました。

（メントリーコースとは本番の試験に向けてのトレーニングコースのようなものでした）

### ☆スライド 18（集合写真）

### ☆スライド 19（審判の様子）

再び筆記試験と実技試験がありました。実技では言うことを聞かないマレーシアの選手の試合に当たってしまい、カードを出すべきところを出せずに何度もその選手を注意することになってしまいました。アセッサが目の前で見ているところで本当に苦勞して、これは落ちたかとへこみました。それでも、毎回仲間に恵まれてなんとか合格することができ、5月のトマス杯・ユース杯でBWFの試験を受けることが決まりました。

### ☆スライド 20（決勝の審判メンバー）

## ☆スライド 21 (タイトル)

BWF試験 トマス杯・ユバー杯2018

## ☆スライド 22 (トマス杯・ユバー杯集合写真)

そしてBWFの試験本番。

今までと同じように、講義、筆記試験、実技があり、アジアから3名(中国・香港・日本)、ヨーロッパやパナマから全部で8名参加しました。アジアの受験生はヨーロッパのアセッサー(試験官)が評価をすることになっていて、試合だけでなくすべての行動を評価されてすごく不安な毎日でした。誰が誰を評価するなどは知らされていなかったのですが、この人かな、と思う人はいました。その試験官がフランスの方で、顔が怖いんですね。そしてアドバイスとかあまりなく、ただぎょろりとした目で見ていてという感じでほんと冷や汗ものでした。他の受験生は別の試験官に呼ばれたりしてアドバイスをもらっていたのですが自分がどのように評価されているのか分からず、本当に不安でした。

## ☆スライド 23 (審判の写真)

## ☆スライド 24 (合格証)

決勝前日に発表された結果では、アジアから1名、全部で5名合格しました。

一人ひとり順番に呼ばれて結果を聞くのですが、その時にアセッサーから言われたのは、「あなたは今ようやくスタートラインにたったところ、これから一歩ずつ努力して行って、一流の審判になさい」という言葉でした。学校を長期間休んでいろんな人のサポートで受験に来ているので、合格という結果にほっとして、すぐに日本に電話をして報告し、感謝の気持ちを伝えました。

## ☆スライド 25 (優勝カップ)

## ☆スライド 26 (BWF 審判グッズ)

BWFの審判員になると、ジャケットやポロシャツ、コインにカードなどが送られてきました。特にBWFコインはBWFの審判員しか持っていないとても貴重なもので、いともなくさないように大切にしています。

## ☆スライド 27 (AD カード)

大会に参加すると必ずADカードがもらえますが、改めて家にあったものを整理してみたら、こんなにたくさんの国際大会に参加してきたんだと自分でも驚いています。これも自分の歩んできた審判人生の証だなと思っています。

## ☆スライド 28 (東京オリンピック)

## ☆スライド 29 (東京オリンピック)

## ☆スライド 30 (アジア大会)

## ☆スライド 31 (アジア大会)

## ☆スライド 32 (熊本マスタース)

## ☆スライド 33 (タイトル)

### ②教員と審判 二つの世界で

ところで、少し現実的な話になりますが、私の本業は群馬県立高校の教員でした。通常の仕事にプラス国際審判活動ということになります。国内の国際大会、例えばジャパンオープンなどは、必ず全員参加、海外の大会に参加できるのは基本夏休みなどの休める期間だけでした。ただし、アップグレードの試験に関わるインビテーションがあった時は、その機会を逃さず何があっても優先しなければならないという状況でした。



## ☆スライド 34 (担任として 卒業式)

## ☆スライド 35 (顧問として 京都インターハイ、熊本インターハイ)

勤務していた高校は地元ではインターハイを目指す強豪校だったので、部活は土日も含めて休みはほとんどありませんでした。授業日に海外に行くためには、事前に自習課題を作ったり、副担任にクラスをお願いしたり、部活に指示を出したりしなければなりません。大会後はすぐに帰国して、たとえば長距離フライトの後でも、翌日の朝からは出勤して、自習課題の処理や遅れてしまった仕事の片付けに追われていました。

どんなに大きな国際大会に参加したとしても、職場ではその価値はそこまで理解されず、年休で出かけることも多かったため。本当に趣味でやっているくらいのイメージしかなかったかもしれません。

バドミントン自体、地上波での放映はまれですし、日本の審判は日本人の試合は担当できませんので、私の審判をしている姿はYouTubeでも見ない限り、見る機会はないのです。それでも生徒の中には、国際大会で日本選手の試合を見ていた時に、ちらっと写った私の写真を撮って送ってくれたりするマニアックな生徒もいましたが……笑

## ☆スライド 36 (はのんの写真)

これはアジア大会でワタガシペアのニュースの中で、サービスジャッジをする私を見つけて送ってくれたもの

## ☆スライド 37 (はのんの写真)

こちらはパリオリンピックで志田松ペアのインタビューが放映されたときに、後ろを横切る私を見つけて送ってくれたもの

## ☆スライド 38 (二つの世界で)

もう一つの居場所 自分の輝ける場所、自信を持てる確かなもの

そのような状況でも、国際審判員として、海外で審判をしていると、日常の生活からは離れた自分

のもう一つの居場所を与えられているような気がしていました。そこで自分の可能性に挑戦したり、困難にぶちあたったり、新しい出会いがあったり、教員の仕事だけでは経験できないようなさまざまな体験をすることができる国際審判員としての仕事に誇りを持ち、どんなに忙しくても頑張るモチベーションになりました。

### ☆スライド 39 (タイトル)

パリオリンピック すべてをかけての決断

### ☆スライド 40 (オリンピック決定通知)

パリオリンピックで、審判を務めることが決まったのは、その前年の夏でした。BWF (世界バドミントン連盟) から選出されたことを知らせるメールが届き、日本バドミントン協会を通じて参加の意志を伝えました。日本人女性として初めてオリンピックのバドミントン審判員を務めることとなり、メディアでも取り上げていただき、大変光栄に感じています。

昨年3月まで、私は高校教諭としての仕事と国際審判を両立し、10年以上にわたり活動してきました。しかし、海外の国際大会に参加できるのは年に1～2回程度。そんな状況でオリンピックの審判を務めることに不安を感じていました。

### ☆スライド 41 (当時の生活)

当時の自分を振り返ると、自分の好きなこととはいえ、時間的に余裕がなく、休むという時間がほとんどない生活を送っていました。主人も高校教員で土日いませんでしたし、私もそのような状況で、娘は私の両親に育ててもらったようなものでした。

長い間、主人、娘、実家の両親には苦勞をかけてきたわけですが、それでも私を応援し、海外に送り出してくれていました。オリンピックの審判が決まった時とても喜んでくれていたので、私は自分の気持ちを家族に相談しました。

「教員としての仕事はとても好き。でも選手は人生をかけてオリンピックに臨む。審判も中途半端にはできないと思っている。お金のことは心配だけど、誰もが経験できるわけではないこの貴重な機会にちゃんと準備して臨みたい。教員を退職して審判活動に専念したい」という気持ちを伝えました。

そして家族の反応は……

### ☆スライド 42 (家族の反応)

「辞めなくてもいいんじゃない」とか、「もったいないよ」という言葉を予想していたのですが、家族の反応はまったく違いました。

### ☆スライド 43～46 (海外の大会)

退職を決めてからは、3月のフランス、5月のタイ、6月のオーストラリア、7月のカナダと、できるだけ多くの国際大会に参加し、試合勘を磨くことができました。

### ☆スライド 47 (パリで感じたこと)

そして迎えたパリオリンピック。

私は全5種目16試合を担当しました。直前までの経験を活かし、試合では冷静に落ち着いてジャッジすることができました。コート上では、観客の大声援がとても心地よく、この場にいられる幸せを感じながら、緊張しすぎることなく精一杯やり遂げることができたと思います。

#### ☆スライド 48 (集合写真)

#### ☆スライド 49 (記念の品物、審判グッズ、特別仕様のシャトル)

#### ☆スライド 50 (開会式)

いろいろと話題となったセヌ川での開会式

#### ☆スライド 51 (会場の様子)

#### ☆スライド 52 (審判の様子)

#### ☆スライド 53 (アジアの審判員)

オリンピックに選ばれた審判員は全部で24名、アジアの審判員は9名でした。

必ず各国1人というわけではないので、本当に一生に一度の貴重な機会を与えてもらったのだと実感しました。この写真はアジアから選出された国際線審の方たちも一緒に写っています。

#### ☆スライド 54 (記念写真)

#### ☆スライド 55 (大堀選手、奈良岡選手)

試合の空き時間には日本人の試合も上から観戦することができました。会場全体がパープルに統一されていて、とてもきれいでした。

オリンピックの雰囲気はやはり特別なものでした。もちろん緊張感がありますが、選手たちも勝敗だけでなく、大会に参加できる喜びを感じているようでした。結果がランキング通りとは限らず、想像以上の力を発揮する選手もいれば、思うようにプレーできない選手もいる。そういった点でも、オリンピックは他の大会とはまた違った特別な舞台であることを実感しました。東京オリンピックの時は無観客だったので、声援に包まれた会場で審判ができることは夢のような感覚でした。

#### ☆スライド 56 (タイトル)

##### 第2章 審判という仕事の本質

審判は、主役ではありません。

でも、審判がいなければ試合は始まらない。

「ラブ・オール・プレイ」と私が言って、初めて試合が動き出します。

先月のジャパンオープンに弟家族が見に来てくれました。身内が審判をしていることから、当然試合だけではなく審判にも注目してくれたようで。

一試合の中で、審判が試合中に思った以上に選手と関わっていることに気づいたと話してくれました。サービスの順番、ラインの判定に対する決定、インターバルの時間管理など、実は審判は点数を数えるだけじゃなく、試合の進行をスムーズにするためにいろいろなことに気を配っているんです。

そこで、審判員に必要な要素を自分なりに考えてみました。

## ☆スライド 57 (審判に必要なもの)

- **判断力**：フォルトかどうか、一瞬の判断力。
- **情報収集力**：ルールは常に変わります。新情報へのアンテナは高くしておく必要があります。
- **プラス思考**：失敗してもそれを糧に前を向く。
- **コミュニケーション力**：信頼関係を築くうえで大切。

少し現実的な話もしてしまうと……

年収：バドミントンのセミプロ審判 約133万円 (9,000ドル)

私もセミプロは3年契約で、私が辞めた年にちょうど新しい契約がスタートしていて間に合わなかったので、次の採用の機会を目指していましたが、やはりそれだけで生活するのは厳しいため、8月から日バで働かせてもらうことになりました。

審判は極めて重要な存在ですが、日本で審判の収入だけで生活できるのは、プロ野球とサッカーの一部の審判だけです。Jリーグの審判は年収500万から800万。メジャーリーグの審判員の最低年収は1,650万。とされています。

それ以外のスポーツは他に本職をもったり、アルバイトをしながら、少ない報酬で審判活動を行っているのが現実ですね。でもいつか、バドミントンの審判も、それだけで仕事になるような未来があったらいいなと思っています。

## ☆スライド 58 (ルールについての最新の情報をキャッチ)

先ほど情報収集力が大事と言いましたが、これは選手や指導者の方も同じだと思います。

最新の情報をいくつか紹介します。

### タイムクロック

8日に追加情報がBWFのHPで発表されましたが、マカオオープンで少し試行されたと聞いています。目的はラリー間の遅延を減らすことですが、タイマーをどこにおくか、などまだ定まっていないようです。

## ☆スライド 59 (15点5ゲーム制)

これも試験的に採用されています。目的は試合時間の短縮。テレビ放映向き。選手への負担軽減。試合時間は単複ともに最短で12分、最長はシングルスで54分、ダブルスで50分だそうです。試合序盤の重要性。後半勝負では間に合わない。逃げ切られてしまう。心理面でも点差がこれまで以上に大きく影響。ウォーミングアップは一試合終わったくらいにあげる。ゲームでは8点のインターバルまでフルスピードで動く。先にリードした方が優位。逆転はかなり難しい。序盤でいかにプレッシャーをかけられるか。格下にやられる可能性、逆に格上に勝てる可能性。サービス周りの重要性。相手の得意パターンから、抜け出す。素早く対応できる手立てを持つ必要性。プレーの幅、いろいろな種類の点の取り方を持っているかが大事。いろいろな相手、ショットへの対応力。1点の重み。集中力も大事。

AIによるサービスハイトのジャッジも開発が進んでいるとのこと。

### スピン、スプレーの禁止

※ルールを学ぶことは選手にとってとても大事です。試合中に質問できるのは選手のみ。

正しいルールと最新の情報をキャッチしていきましょう。

今まで日本では、選手サイドと審判サイドはあまり連携していなかった。

強化部や選手指導本部と連携して、選手に役立つ情報は伝えていきたい。

## ☆スライド 61 (タイトル)

### 第3章 審判から見た「強い選手」と「信頼される指導者」

審判という立場で世界トップレベルのバドミントンに携わってきて、いろいろな選手や指導者を見してきました。

審判からみた「強い選手」と「信頼される指導者」の資質について話したいと思います。

まず「強い選手」の資質については

- **メンタルの安定**：勝負どころで出るのはやっぱりメンタルの強さ。審判台にいと、選手の心理状態や息遣いが本当によく伝わります。
- **礼儀と人間性**：強い選手（のほとんど）は、勝っても負けても相手を讃え、審判に感謝することができます。
- **試合への敬意**：試合前の準備は選手それぞれですが、準備はとても大事だと感じています。選手集合所にも、慌ててかけこんでくる選手もいれば、しっかり落ち着いて待っている選手もいて、なかなか面白いです。試合に入る際に時間を守るか守らないかなど、周りに迷惑をかけないことも、試合への敬意と言えらと思います。

「信頼される指導者」の資質については

- **審判、相手への敬意**：指導者の日ごろの行動が選手にも影響するかなと感じています。
- **選手の心身管理を最優先**：怪我をしていても連戦させるなど無理をさせるのは選手にとって負担

## ☆スライド 62 (最後に伝えたい事)

少しまた国際審判について話が戻るのですが……

## ☆スライド 63 (後輩へのバトン)

## ☆スライド 64 (庄内チャレンジセミナー)

今年の6月末に山形県の鶴岡市で、庄内国際U16という大会がありました。世界各国のU16のトップ選手が集まり、実質、このカテゴリーの世界一を決めるという素晴らしい大会です。そこで国際審判養成セミナーの前段階の、チャレンジセミナーというものを初めて実施しました。

国際審判に少しでも興味のある審判員を全国から募集し、山形県の方とともに講習、実技を通して国際審判員に必要な技術を可能な限り伝授してきました。最初は自信のなさそうだった受講生たちも、最後のほうは見違えるように堂々としたパフォーマンスをしてくれて、何か手ごたえをつかんだような様子でした。この経験を都道府県に持ち帰り、シェアしてくれると嬉しいなと思っています。

## ☆スライド 65 (熊本マスタース 養成セミナー)

また、2023年には国際審判養成セミナーを熊本マスタースで行いました。

こちらはSuper500のワールドツアーなので、世界のトップ選手がたくさん出場します。その緊張感の中で実際に審判をしながら研修を行い、その時のセミナー生の一人が、もうすぐ台湾で開かれる国際審判への第一歩、リージョナルコースに挑戦することになっています。私たちも仲間が増えることを心より願っています。これらのセミナーは毎年開けるといいと思っているので、興味のある方がいらっしゃいましたらぜひご参加ください。

## ☆スライド 66 (挑戦へのエール)

長くなりましたが、私の歩んできた道について話させていただきました。

教員になった時は定年までこの仕事を続けるものだと思っていましたが、人生何が起こるかわかりませんね。自分の選んだ道が正しいのかなんて分からないですが、今言えることはまったくの後悔をしておらず、今が幸せということです。この道を選んで良かったと思えるようこれからも頑張っていると思っています。

みなさんに最後に伝えたいのは、

「やりたいことがあるなら、挑戦してほしい。」

「人生は一度きり。だったら先のことを考えすぎず、今自分の信じる道を進んでほしい」

無謀な決断だと思われるかもしれませんが、それを思い切ってやってみた一人のバドミントンが大好きな女性がいることを今日は覚えていただけたらと思います。

これまでよりも時間に余裕ができたため、今後は国内、特に県内での審判活動に力を入れ、地元に貢献していきたいと考えています。また、国際審判としての経験を多くの人に伝え、バドミントンの魅力や審判員の重要性を広めていくことにも努めていきたいと思っています。

